

高等学校の部・胡堂賞

願い、感謝

紫波総合高等学校 三年 藤原 奈緒子

「一冊の本、一本のペン、それで世界を変えられます。」

誰でも一度はこの言葉を耳にしたことがあるのではないのでしょうか。この言葉はある少女が国連本部で演説をした時のものです。世界の子どもたちのために教育を、と立ち上がった少女。彼女は史上最年少でノーベル平和賞を受賞しました。彼女の名は、マララ・ユスフザイ。タリバンの銃撃を受けた後、奇跡的に回復した彼女は、非暴力による抗議活動の世界的シンボルとなりました。

「マララく教育のために立ち上がり、世界を変えた少女く」私がこの本を読もうと思ったきっかけは、最初に書いた言葉に魅かれたからです。どうしてそう思うようになったのか、なんで彼女は教育のために立ち上がったのか、彼女の生活はどういうものだったのだろうかと疑問に思ったのがこの本を手にとったきっかけです。なぜ教育のために立ち上がる必要があったのか。幼い頃から当然のように教育を受けてきた私たちには想像を超える背景がありました。

本を読み進めているうちに衝撃的な事実が書かれてありました。それは女子が学校に通うことを禁止するというものでした。いつも通りに学校へ向かい授業を受け、友達と他愛もない話をしていた、そんな日常がその一言で崩れたのです。私たちに想像できるでしょうか。私だったらきつと耐えられないと思います。中には勉強が嫌いだから嬉しいと考える人もいるかもしれません。でも学校の中で騒いだりしていた日々は、かけがえのないものだと思います。だからこそ、この一文を見た時になぜ、どうしてと思いました。そしてもう一つ驚いたこと。彼女は、こうしたひどいことをして、自分や友達を撃ったタリバン他過激派を憎んではいけないのです。むしろ、この事件がきっかけで自分の中の弱さが消え、逆に強さと勇気が生まれたと彼女は言っているのです。そんな彼女の人柄に私は胸を打たれました。

自分の立場で考えてみてください。もし誰かに、友達でも知り合いでも、その誰かにひどいことや裏切られたとします。あなたはその人のことを許せるでしょうか。多分、多くの人は怒るでしょう。なぜ自分がこんなことをされなければいけないのだ、どうしたら同じ思いを分かってもらえるか。そう考えてしまうのではないのでしょうか。実際に私も友人と仲違いをした時に思ったことがあります。でもこの本の主人公であるマララさんは、そんなことは思わなかったのです。彼女はただ、教育をうけることのできない子どもや、今もなお厳しい労働を強いられている女性のために、声をあげたくともあげられない人々のために立ち上がったのです。教育こそ、知識こそ武器になるのだと、そう言った彼女の心の強さ、そして何かを許せる強さが彼女を支えているのだと思いました。

「世界は一つの家族。困っていたら手をさしのべて助ける。それが私たちの使命。」  
私はこの本を読んで涙が浮かびました。一人の少女が、顔も知らない、性格もわからない、そんな人達のために立ち上がったことに感動したのです。同時に、今の自分の状況を振り返りました。日本という国は平和で教育も受けられる。そんな所に生まれ、それが当然と思いつながら過ごしてきました。だけど本当はその教育、平和こそ奇跡であるのだと思います。私たちは当たり前を当たり前のように過ごしてきました。それがどれほど恐いものなのか。当たり前ではない、世界を見た時そう思えるようになりたいと思いました。

世界中の誰もが、教科書を手にとって、心から幸せを思える世界を目指そうと語った少女。彼女をとりまく世界は変わったが、彼女自身は何も変わらぬ。きっとこの先も人々のために語っていくのだと思います。

もう一度、自分のことを考えてみてください。当たり前を過ごしてきた日常、誰かの傍にいれる幸せ。その全ては当然に与えられたものではなく奇跡の一つなのです。私は彼女を尊敬します。どれ程の人が見ず知らずの人のために声をあげられるでしょうか。彼女が声をあげたおかげで世界に目を向けることができました。そして何気なく過ごしてきた日々感謝することができました。

この世界そのものが家族。その一つ一つを大切に思えること、それがどれだけ嬉しいことかこの本から学ぶことができました。マララさんの行動が世界中の子どもたちの原動力になる。私は彼女の勇気と行動力を目標に、感謝を忘れず生活していきたいと思えます。

図書名 マララ 教育のために立ち上がり、世界を変えた少女  
著者名 マララ・ユスフザイ